

A Brief Note No. 200

発行日：2010年4月7日

関東平野ローカル線の旅

千葉市花見川区 小林 敬

もうすぐ4月になろうというある日、総武本線四街道駅で始まり京成成田線八千代台駅で終わる小さな鉄道の旅を試してみることにした。

四街道駅発9時44分、総武本線鹿島神宮行の電車は千葉の里山を縫うように走って行く。

いつも車で横切る物井の小堤踏切も車窓から見ると想像以上によい景色だ。

成田10時05分着。成田線に乗り換えると客層は少し変化して、東京方面へ行きそうな顔つきの人が多くなる。そして成田空港に近いことからだろうが、車内のあちこちに色々な顔つきの外国人が見られる。

下総松崎(しもうさまんざき) 停車場と呼んだ方がしっくりするような味わいのある駅舎だ。各駅に止まるたびに気をつけて見ていると、時々ステンレス車輛の電車には不釣り合いな昔っぽい駅舎が現れたりするのが面白い。

我孫子10時56分着。成田線の乗客のほとんどは常磐線の上りホームへと吸い込まれていった。常磐線の下り電車に乗り換えて取手へ。今回の旅路はここからがメインだ。

関東鉄道常総線、長丁場に備えてトイレに行き準備を整えてプラットフォームへ。11時30分発下館行列車とのホームの表示には「(水海道乗り換え)」と補足が書き加えられている。(上の写真) 実際は水海道までしか行かないが、水海道駅で反対側のホームに待ち構えている列車に乗り換えれば下館まで行くことができるという、親切なのか詐欺なのかわからない不思議な表示だ。

取手駅を発車すると、ディーゼルカー特有の唸り声をあげながら北西に向かい常磐線の線路から遠ざかって行く。(下の写真)

しばらくの間は車窓に入ってくる景色は住宅地の息遣いばかり。30年以上前になるだろうが、仕事で初めてこの線に乗り稲戸井まで行ったことがある。あたりに人里はなく、踏切をディーゼルカーが通り抜けるともう静寂そのもので、特に日暮れ時の寂寥感

は何とも言えぬものだった。そんな記憶をたどりながら車窓の景色に見入っている内に南守谷(みなみもりや)そして少しずつ右にカーブして、北に向かうようになると目の前に突然大都会が広がってきた。

つくばエクスプレスと乗り換えができる守谷(もりや)駅。ここで多くのお客さんが下りてしまうと、買い物や病院へ行くような感じのお年寄りが多い「生活列車」になってしまう。

常磐自動車道の谷和原インターの下を潜り抜けると「小絹(こきぬ)」という可愛らしい名前の駅に入る。こんな素敵な意味ありげな名前の町なのに、今では「つくばみらい市」という無粋な都市の一部になってしまった。(なぜか茨城県には町村合併でできた無粋な名前の市が多い)

水海道(みつかいどう)12時01分着、プラットフォームの反対側に下館行が止まっていて、スムーズに乗り換えができる。



下館行きは12時03分発。水海道を過ぎるとやがて前も後ろも右も左もまっ平らな畑が広がり「これぞ関東平野」と言えるような景色に変わってくる。レールは鬼怒川と小貝川の間を一直線に、ひたすら北へ北へと進んで行く。ここから先の駅はほとんどが無人駅で、ワンマンカーが大活躍する。

中妻（なかつま）、三妻（みつま）と快適に走り抜けて石下（いしげ）駅が近づく頃になると、進行方向右側の窓にお城が見えてくる。周囲に大きなビルがないのでどこからもよく見える。城の名前は豊田城というそうだが、正式には石下町地域交流センターという施設らしい。

石下を過ぎる頃から霞がかかったような空がすっきりと晴れて、筑波山が視界に入ってきた。

進行方向左側のベンチシートに席をとって、向かい側の窓越しにしばらく筑波山観賞を楽しむ。細かな起伏やカーブを通過するたびに微妙に筑波山が見える位置や形が変わって見えるのがとても面白い。

玉村（たまむら）駅あたりからだ、筑波山の裾野が長く尾を引いて土浦の町に落ちる様子がかがえる。やがて車内アナウンスが下妻（しもつま）駅到着を告げる頃になると筑波山はちょうど向かいの席の窓枠の高さとぴったりの高さになり、一枚の窓ガラスの額縁の中にきちんと収まった瞬間、下妻駅に到着しドアが開いた。

下妻を過ぎると、大宝（だいほう）、騰波ノ江（とばのえ）、黒子（くろご）と風変わりな駅名が続く。

騰波ノ江という地名の起源は万葉集に遡るといふ。騰波ノ江駅は筑波山との直線距離が一番近い駅だけあって眺めは申し分ない。古典的な駅舎のたたずまいとともに気持ちの良い駅だ。

下館（しもだて）、JR水戸線の線路の南側に遠慮がちに付いている短めのプラットホームに入線。反対側の北側にも同じように短いホームがあり緑色のディーゼルカーが止まっている。あれが、これから乗る真岡鉄道だ。

長い編成の水戸線の電車とマッチ箱のような一両編成の真岡鉄道が走り去ってしまうともう下館駅は人っ子一人見えない静かな空間になってしまう。次の真岡鉄道の時刻を確認して、昼食と駅の周りの散策。



駅の北口に横文字の名前の大規模ショッピングモールらしき建物が見えるので、とりあえず「食」を目指して行ってみることにしたのだが……。（左写真）

何とこのビルはもぬけの殻、空いたスペースに申し訳なように自治体のオフィスが入っているだけ。周囲には焼き鳥屋がある程度で、食事する場所はない。この大規模店舗が進出した時にその影響を受けて生活機能の一つであった近隣の小売店がつぶれたと思われる。そして、無理して作った地方都市の大規模店舗は立ち行かなくなり、

全国で問題になっている「シャッター通り第二段」になってしまっているようだ。昔はにぎやかだったと思われる商店街に、今でも元気を続けていそうなお菓子屋さんの古い建物を見つけた。（右写真）

街並みの中の家々の間を通り抜けて散歩の後、駅の上を通り抜ける立派な歩道橋兼袴線橋を渡って南口へ行ってみることにした。

なんと南口は広い道路が駅に突き当たっているだけで、他には何もない西部劇の決闘シーンを思わせる風景。駅の出口の前に辛うじて「中華そば」という赤い看板を見つけて飛び込んだ。お客はそこそこ入っていた。



(一軒しかなければそうだろうな)

カウンターの奥の厨房で、80歳は過ぎていると思われる腰が60度ぐらいに折れ曲がった老婆が大鍋と格闘している姿が見えた。他には70代後半と思われる若い(?)女店員がひとり。お客さんはほとんど地元の方のようで、主婦・親子連れ・夫婦・JRの制服を着た駅員などなど、お店の中の勝手にわかっているらしく、自分で水をついだりテーブルを拭いたりしている。老婆の手際の悪い調理では相当待たされるに違いないと思って覚悟を決めていたら、意外に手早くことが運んでいて、タンメンはすぐに手元に届いた。麺が少なめで野菜が盛り上がるように入っているし、スープの味も上々、美味しいタンメンだった。

線路沿いを散歩して踏切を渡り、再び北口へそして真岡鉄道の14時33分茂木行。ここからはSuicaは使えない。

下館を発車したディーゼルカーが次に止まる駅は「下館二高前」朝のにぎわいが想像できる。自分の学校の名前が駅名になっていると、学生の一挙手一投足は他の乗客に見られているのでは？朝晩の混雑時に学生のマナーが多数の市民の目にさらされているということで、生徒の質がよくなるきっかけになるということになるのだろうか、などと勝手に想像してみた。

下館二高前を過ぎると車窓の景色は再び田園風景に戻り、車体を前後左右にゆさぶりながら北上。五行川に沿って進路を少しずつ北北東に変え始めると、真岡の街並みが見えてくる。(右の写真：次の停車駅は「真岡」)そして、あっと驚くような駅舎がディーゼルカーを吸い込んでいった。



真岡(もおか)駅の駅舎は蒸気機関車をモチーフにしたモダンな建物であらゆる部分で蒸気機関車の各部をイメージしているそのこだわりぶりに驚かされる。駅の中の看板に「だれもがほっとできるまち真岡」と書いてあった。とっさに先程の車内風景を思い出した。(右の写真)



(真岡駅の駅舎：Wikipedia からコピー)

真岡駅を過ぎると線路は大きく右折して東北東に進路を変え、いくつもの小川を渡って正面に雨巻山群を見るようになる。しばらくすると進路を再び北に取り直して益子(ましこ)駅に到着。

益子は関東平野の東端に位置し茨城・栃木県境の山が正面に迫り、関東平野のど真ん中を突っ切ってきたこれまでとは異なる景観である。

益子を出たディーゼルカーは里山の淵に沿うように北に向かって肩をゆすりながら進んで行く。

市貝町に入り、多田羅(たたら)で北東に向きを変えて市塙(いちはな)を過ぎると大きく直角に曲がり、進路を南東に変えて終点の茂木に向かう。ここにも笹原田(ささはらだ)、天矢場(てんやば)と味のある駅名が続き、最後まで飽きさせない。

茂木(もてぎ)15時45分着、真岡鉄道の終点、どん詰まりとなるこの駅には構内に転車台もある。

ディーゼルカーが着いて何人かのお客が下車したが、数分で人影がなくなり、駅前にはいつくるかわからぬ客を待つタクシーが一台だけになった。駅前には何もないので国道に出てしばらく様子をうかがったが、特に店もなく静かなものだ。駅前に戻ると駅前のバス停にバスが止まっているので、時刻表をのぞいて見る

